

「考えさせられる」葬儀(六)

〈ひとり死〉時代のお墓のゆくえ

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、「葬送儀礼」に関する調査・分析を続けています。これまでの研究において問題となり続けてきたことは、「社会状況の変化」を把握することと、「社会状況の変化」が「葬儀」や「お墓」にどのような影響を与えているのかを理解していくことでした。

「社会状況の変化」に関しては、出版物や、各種統計調査から確認を行っています。その上で、「社会状況の変化」が「葬儀」や「お墓」に与えている影響については、葬儀関連の書籍や、葬儀社を中心としたホームページにどのような質問が記載されているのかを整理・分析することによって、現代において「葬儀の何が問題となっているのか」「葬儀に対して人々はどうのような意見を持っているのか」を確認しました。この成果につ

いては、『宗報』二〇一八年五月号に「考えさせられる」葬儀(一)として発表いたしました。

また、現代の「葬儀」「お墓」の実状をより正確に把握するために、『ひとり死』時代のお葬式とお墓(岩波新書、二〇一七年)など「葬儀」「お墓」に関する書籍を多数発表されている小谷みどり氏(シニア生活文化研究所所長、浄土真宗本願寺派総合研究所委託研究員)をお招きし、議論を行いました。この議論については、『宗報』二〇一八年七月号、八月号に「考えさせられる」葬儀(二)「考えさせられる」葬儀(三)として発表いたしました。

こうした研究を経て、今回は「お墓」の現状をより詳しく研究するため小谷みどり氏を再度お招きして、研究会を開催いた

しました。

「葬儀」「お墓」を変える三要素

「社会状況の変化」について、小谷氏は三つの特徴を指摘されました。

第一に、高齢で亡くなる方の増加です。一九八五年の死亡者のうち八十歳以上の方の割合は全体の三三・七％でしたが、二〇〇〇年には四三・八％、二〇一六年には五九・四％と増加しています。九十歳以上の方に限定すれば、二〇一六年の全体の死者数のうち男性が一四・二％、女性が三七・二％、にも昇ります。つまり、八十歳以上、九十歳以上という高齢で亡くなる方は、二〇〇〇年代に入り増加しつづけているということです。

第二に、高齢になって亡くなる方が増加することと並行して、日本では、今後二十年間、死者数が増加すると予測されているということです。厚生労働省の「人口動態統計」によれば、二〇三八年に年間一六八万人の方が亡くなることを頂点として、それ以後死者数は減少していくと予測されています。

第三に、高齢者の核家族化が進行しているということです。近年は、親と子どもが同居することも少なくなってきたことで、高齢者夫婦だけの世帯や、伴侶の方を亡くされた高齢者の

単身世帯などが増加し、様々な問題を引き起こしていますが、小谷氏は特に未婚の子どもと生活する高齢者世帯が飛躍的に増加していることに注目されました。「未婚の子ども」について、日本では国勢調査などをもとに生涯未婚率（五十歳時の未婚割合）を出しており、未婚率の上昇が今後より深刻になると予想されています。例えば、内閣府のHP (https://www8cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measure/w-2018/30webhonpen/html/bl_sl-1-3.html) には、以下のような記載があります。

五十歳時の未婚割合をみると、一九七〇（昭和四十五）年

は、男性一・七％、

女性三・三％であ

った。その後、男

性は一貫して上昇

する一方、女性は

一九九〇（平成二

）年まで横ばいであ

ったが、以降上昇

を続け、前回調査

（二〇一〇（平成二十

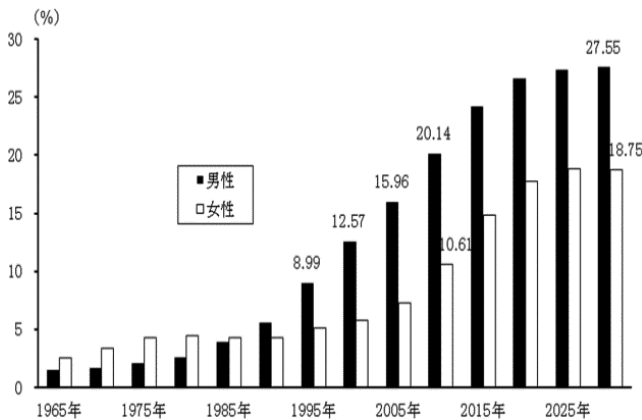
二）年国勢調査）で

は男性二〇・一％、

女性一〇・六％、

二〇一五（平成二十

小谷みどり氏提供資料「生涯未婚率の将来設計」



七)年は男性二三・四%、女性一四・一%と、それぞれ上昇している。二〇一五年の国勢調査の結果に基づいて出された推計は、これまでの未婚化、晩婚化の流れが変わらなければ、今後も五十歳時の未婚割合の上昇が続くことを予測している。

高齢化から無縁化へ

小谷氏は、「葬儀」や「お墓」にどのような課題を投げかけているかを「社会状況の変化」に即して提示されました。

葬送儀礼が縮小する原因の一つに、高齢で亡くなられる方の増加が挙げられます。高齢で亡くなられた方と近しい親類や地域の方も亡くなられている場合が多くなりますし、存命であっても葬儀に参列することが難しくなってくるからです。こうした現状に加え、小谷氏が指摘するのは、高齢で亡くなられる方が増加すれば必然的に葬儀の喪主やお墓を継承していく方も高齢になっている、ということです。介護の分野では「老老介護」「認認介護（認知症の高齢者が認知症の高齢者を介護する）」という言葉で指摘されているように、現在の日本において「高齢化」はこれまでには存在しなかった様々な問題を引き起こしています。「葬儀」「お墓」に限定すれば、高齢で亡くなる方の増加は、「葬儀」の執行の有無や「お墓」の継承そのものに関わります。

ここに小谷氏が問題視された「生涯未婚率」の問題を加えて考えてみますと、より深刻な状況が浮かび上がってきます。日本では、一九九五年には五十歳男性の八・九九%の方が未婚だったとされていますので、その方々は二〇一九年では七十九歳になられています。高齢で亡くなる方が増加していることを考え合わせれば、現在七十九歳で未婚の男性が高齢のご両親のお世話をされている場合もあるかと予想されますが、恐らく、七十代前後で両親の葬儀を経験されている場合が多いと考えられます。こうした方々、また、今後増加してくる未婚者の方々が直面する問題は、ご自身が高齢になった時に、高齢のご両親の葬儀を行い、お墓を継承されていくということです。このことだけでも大変なことですが、そうした方々は、自分が亡くなった後、「誰が自分の葬儀を行い、お墓の面倒をみていくのか」という問題にも同時に直面しているということです。こうした状況であれば、恐らく子々孫々で継承していくことを前提とした「家墓」は、無縁化していく可能性は非常に大きくなります。小谷氏は、生涯未婚率の増加が引き起こすであろう様々な問題は、「今まで」の日本社会には存在していなかった問題であり、「これからの社会」が対処すべき大きな課題であると指摘されました。

「社会状況の変化」に即して「葬儀」や「お墓」の実状を指摘される小谷氏が強調されたのは、「葬儀」「お墓」の「これまで前提にしていた状況」が急激に変化していることに対する認

識の必要性と、その「変化」にどのように対応していくかは僧侶や寺院だけの問題ではなく、日本が直面する喫緊きつぎんの課題だということです。例えば、「三世代同居」が当たり前であれば、「誰が葬儀を行うのか」「誰がお墓を継承するのか」はそこまで問題になりません。しかし、「葬儀」を行うべき方が高齢であつたり、「お墓」を継承する方がいなくなつたりすることが珍しくない状況において、寺院や僧侶がそうした問題にどのように対処していくかということがいまだ判然としていないことは、一般の人々にとっても不安なことであると考えられます。

意識の変化、形の変化

小谷氏は、続いて「社会状況の変化」は、人々の「意識」にどのような変化を生み出しているのかを調査結果から指摘されました。

一つめは、「どのようなお墓に入りたいか」という調査です。調査では「先祖代々のお墓」が最多の三八・九%だったので、小谷氏は「先祖」という言葉に対する人々の意識に注目されました。「先祖」という言葉は、辞書では「家系の初代からすべて」を意味すると説明されていますが、小谷氏の調査によれば、最近の人々が用いる「先祖」という言葉は、「自分が知っている範囲の人」を指す言葉になっているとのことでした。つまり、最も範囲を広くとつたとしても、子どもから考えれば

「祖父母」の代まで、「祖父母」と疎遠であれば「両親」しか「先祖」と認識しない人々が増加しているということでした。

二つめは、お墓の形や文字の変化です。近年は、掃除の容易さなどから洋型のお墓が増加しているそうで、そのお墓に刻まれる文字は「〇〇家之墓」と彫る場合は少なく、「感謝」「和」「慈」「安らかに」といった様々な文言が彫られているそうです。これらの文字は、亡くなった人から残される人への、あるいは、残された人から亡くなった人への「メッセージ」であり、「お墓」が一種のモニュメントと化していることを意味しています。

こうした意識の変化が「お墓」にどう影響を与えているのかについては、意識以外の要因も関連して複雑ですが、現状として指摘できることは、「墓じまい」や「無縁墓」の増加が挙げられます。小谷氏は、ある都市が建設した公営墓地の例を挙げられました。そこでは全五期の計画で大規模な公営墓地建設を計画したのですが、死者数の増加に比例してお墓の造営が増えなかつたため第一期で墓地建設が終わり、しかも近年では「墓じまい」が増加しているということでした。こうした例も、「家墓」を前提とした「お墓」が現代において成立しにくい状況があることを示していると考えられます。

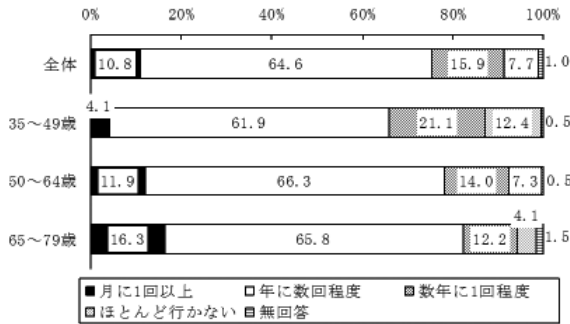
なお、小谷氏は「墓じまい」は、墓石の処理と遺骨をどうするかという問題があるため、墓を移す「改葬」とは分けて考えるべきだと指摘されたことを追記しておきます。

死者と向き合う場

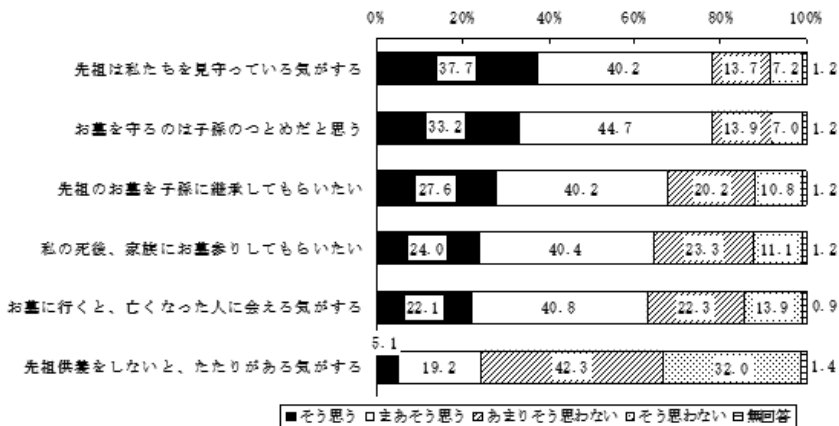
小谷氏は「お墓」が直面する厳しい状況を指摘されたのですが、同時に「お墓」に関してまったく反対とも思える調査結果も示されました。それは、月に一回以上、あるいは年に数回程度、墓参を行う人々が七五%以上であるということ、「先祖が私たちを見守っている気がする」「お墓を守るのは子孫のつとめだと思う」などと答える人々も七〇%以上であるということです。こうした調査結果について、小谷氏は、「お墓」が現代において数少ない「死者と向き合う場」「死者と対峙する場」になっているからではないかと指摘されました。この点を小谷氏は、多くのお墓が流されてしまった東日本大震災以後、流された墓石を見つけ、新しい場所に移し、多くのお花が供えられているという被災地の事例を紹介されながら、次のように説明されました。

「お墓」は、法律上遺骨がなければならぬため、東日本大震災の後に見られる墓石だけを並べた「お墓」は、法律上は「お墓」ではない。しかし、そこにお花をそなえる人々の意識は、普通の

変わらない心 ①墓参行為



注：35歳から79歳までの全国の男女600名に、2009年9月に調査を実施した。
有効回答数は584名(97.3%)。



墓参行為と変わらない。つまり、「遺骨」の有無にかかわらず、「死者と向き合う場」としての「お墓」の必要性は現代において大きいのではないか。

この指摘は、お墓のあり方の本質を問うものであるとともに、これからのお墓の意義を考えていく上で、重要な視点になる。

ると考えられます。

「横のつながり」が安心につながる

では、「お墓」は今後どのような形になっていくのでしょうか。小谷氏は、子々孫々といった形で「これまでのお墓」が前提としていた「縦のつながり」ではなく、「横のつながり」によって「お墓」が形成されていくことが増加していくのではないかと指摘されました。その一つの例として、栃木県那須市なすにある高齢者向け住宅「ゆいまーる那須」における共同墓を紹介されました。

「ゆいまーる那須」では施設内で亡くなった入所者への儀礼を行うなどして、入所者同士の「生きている間のコミュニティ形成」を図っているそうです。小谷氏が注目するのは、入所者同士が共同墓を前にして儀礼を行うことで、「自分が亡くなった後も同じようにしてもらえらる」という感覚を共有することが、安心につながり、儀礼継続の重要な要素になっているという事です。

小谷氏は「生きている間」にいかにかにコミュニティーが形成できるか、そして、「亡くなった人（死者）」とともにある場を現代においていかに形成していけるか、が「現代社会」において重要であると述べ、そのためには、「現代社会の状況」を把握すると同時に、「現代社会」において宗教が提示すべき事柄を、

「現代的意味づけ」をした上で発信していく必要があると指摘されました。「これまでの葬儀やお墓」を前提とした社会が変容していく中で、「これまで通り」の内容では現代において受け容れられない状況が増えていくことでしょう。研究所としては、そうした危機感の中で、「葬儀」「お墓」を考え直していきたいと考えています。

（報告者：岡崎秀磨 富島信海）